

# 風土記の丘の花だより<sup>201</sup>

今、そしてこれから見られる植物(2023年9月2日)

異常気象の四文字で片付けてしまえばそれまでですが、いつまでこんな暑さが続くのでしょうか。本当に気も体も萎えてしまいます。風土記を歩かれる方は、ほんとうに熱中症にご注意ください。



こんなに暑いのにハギが咲き始めています。これはマルバハギです。名前のとおり葉が丸く小さめで、花の柄が短いので、枝先に固まって咲いているように見えます。毎年「ハギは種類が多くて、見分け方が難しいです。」と申し上げていますが、眺めるだけなら、それが何ハギでもいいのですから、「ああ、ハギやなあ」と、秋の風情を感じていただければけっこうかと思えます。マルバハギは、万葉植物園にも植えられています。自生も多く見られる、ごく普通のハギです。



他の木や金網のフェンスなどに巻き付いてセンニンソウが白い花を咲かせています。同じ仲間のボタンヅルとともに、夏の終わりを代表するつる植物で、どちらも白い花を咲かせます。園芸のお好きな方はご存じかもしれませんが、クレマチスやテッセンと同じキンポウゲ科の植物です。漢字では「仙人草」と書き、花の後にできる綿毛が仙人のひげに似ていることによるらしいですが、私は仙人に会ったことがないので、なんとも言えません。



足もとに薄紫色の花が咲いていませんか？これはリュウキュウヤブラン（漢字では琉球藪蘭）という長ったらしい名前の草です。ただのヤブランならご存じの方も多いかもしれませんが、コヤブランともいうくらいで、せいぜい20センチ余りでしょうか。ヤブランは30センチ以上に伸びますね。また、ヤブランは一株ずつ生えますが、これは地下茎を伸ばし、株を増やして群生します。名前にランと付きますがラン科ではなく、かつてのユリ科、今ではキジカクシ科という仲間分類されています。



至る所でこの花を見かけます。ヌスビトハギの花です。一つの花はせいぜい3ミリ、あるでしょうか。それほど小さな花が茎にいっぱい咲きます。どこにでも生えて、引き抜きにくく、やっかいなので、外来植物かと思われがちですが、在来植物と考えられています。もう少しすると咲き始めるアレチヌスビトハギは外来種で、花は鮮やかなピンク色できれいですが、これ以上にどこにでも生えて、種は衣服に付きまぐるし、本当にやっかいな草です。 松下